

かけはし芸術文化振興財団プレゼンツ

電子楽器とアコースティック楽器の共演

0歳からの音楽物語 ～春のコンサート～

◆高橋 宗芳 (ヴァイオリン)

桐朋学園大およびイーストマン音楽院を卒業。アルバニー響、チャールストン響、ロチェスターフィル等の在米楽団で演奏。国内では日本フィル、群馬響のゲストコンサートマスター、広島響のゲスト首席を務め、N響と新フィルでも演奏。ニューヨーク市立大、ピエール・モントゥー・スクールにて奨学生として指揮を学ぶ。Lucidity Chamberistasをニューヨークに設立しディレクターを務める。

◆高梨 真実 (ヴァイオリン)

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て同大学を卒業(ヴァイオリン)、同大学院入学後、文化庁新進芸術家海外研修員としてパリに留学。パリ市立音楽院を満場一致の優秀な成績で卒業。帰国後東京芸術大学大学院修士課程修了。在学中、芸大フィルハーモニアと共演。第17回パリ国際バッハコンクール第3位。現在、昭和音楽大学講師。

◆花岡 萌実 (ヴァイオリン)

桐朋女子高等学校音楽科を経て桐朋学園大学を卒業。昭和音楽大学大学院修士課程、同大学院博士後期課程を修了。博士(音楽)。昭和音楽大学合奏研究員を務めた。

2015年、ジェラルド・ブーレ氏と二つのヴァイオリンの為の協奏曲や室内楽などを共演。矢内和三氏の「ヴァイオリンとピアノの為の6つの詩的幻想曲」を初演する。「ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクール2016」第3位。

◆植村 理一 (ヴィオラ)

ニューヨーク州生まれ。東京藝術大学付属音楽高校卒業、同大学入学。Gee国際奨学金コンクールに優勝、シンシナティー州立大学音楽学部を首席で卒業。オハイオ音楽家連盟コンクール優勝。ベルリンフィル、ウィーンフィルなどの首席奏者と室内楽を共演。1993年から2001年までイタリア、フィレンツェのフォーネ弦楽四重奏団ヴィオリストに就任。ミラノ・スカラ座など、ヨーロッパ各地の招聘される。東京芸術大学講師、全国高校オーケストラ連盟審査員。

◆玉川 克 (チェロ)

5歳より才能教育研究会にてチェロをはじめ。宇都宮短期大学附属高校音楽科を経て、桐朋学園大学カレッジディプロマコース修了。2005年よりリサイタルを開始。2011年にはバッハの無伴奏組曲全曲を取り上げる。室内楽奏者として非常に多くの演奏会に携わっており近年新たに、出身地である栃木県において本格的な室内楽コンサートを届ける「玉川克の室内楽シリーズ」を主宰、毎年3回のコンサートを開催している。その他、客演首席奏者として国内の主要オーケストラから招聘されるほか、クラシック、ポップスなどジャンルを問わずレコーディングへの参加多数。

◆野崎 くらら (パーカッション:aFrame)

「高校生の頃ジャズミュージシャンになりたく音大進学を希望するも、基本的な演奏技術を学ぶためクラシック部門で入学する。4年間現代曲の勉強に励み、2014年にルーマニアで行われたパーカッションフェスティバルに出演。アフリカンパーカッションはマリ出身のダラマン・ジャバテ氏に、ドラムスは龍本季典氏に手ほどきを受ける。卒業後はライブ、ミュージカル伴奏など。レギュラーバンドは「松本治musica immaginaria」「trilogue +」、レギュラーリーダーバンドはカルテットバンド(宮野裕司as、阪口良太gt、トオダイスケelb、敬称略)、トリオバンド「Trio PBV」(廣木光一gt、トオダイスケelb、敬称略)。

◆三谷 温 (キーボード)

桐朋学園大学卒業後、園田高弘氏の下で研鑽を積む。03年文化庁より初代「文化交流使」に任命され、ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団との共演の他、欧州各地で多数の演奏会及びマスタークラス指導を行う。50回を超えるザルツブルクでの「On Mitani Zyklus」(ソロ・室内楽・協奏曲のコンサートシリーズ)をはじめ、アメリカ、ロシア他世界各国で演奏会・公開レッスンを行うなど国内外で活躍。

現在、昭和音楽大学教授、演奏表現学会理事、(社)アーツブレッド代表理事、アーツ室内オーケストラ音楽監督。



◆小林 星蘭 (音楽物語・ナレーション)

2004年東京都出身。2009年カルピスのCMでデビューし、テレビ、映画など多数出演。その後CDデビュー、現在はテレビ番組のナレーション・声優など多岐にわたり活躍中。

電子楽器・aFrame(エイ・フレーム) [エレクトロオーガニック パーカッション]

aFrameとは、楽器界のレジェンド、梯郁太郎氏が設立した新興メーカー「ATV」が開発した、アコースティック楽器の感覚で演奏できる今までにない全く新しい電子楽器です。aFrameはプレーヤー本来のフィーリングを損なうことなく、アコースティック楽器の感覚で演奏できる今までにない全く新しい電子楽器です。独自に開発された※「Adaptive Timbre Technology」(アダプティブ・ティンバー・テクノロジー)により、従来のPCM音源方式のデジタルパーカッションでは不可能だった、パーカッション本来の奏法である「叩く」「押す」「擦る」ことで発音、音色変化、エフェクトコントロールなどを表現することができます。

